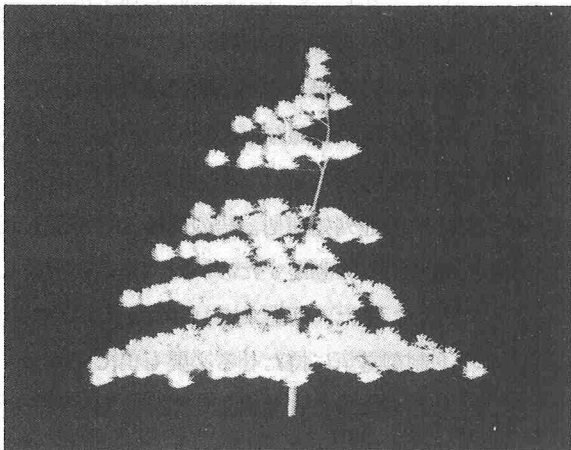
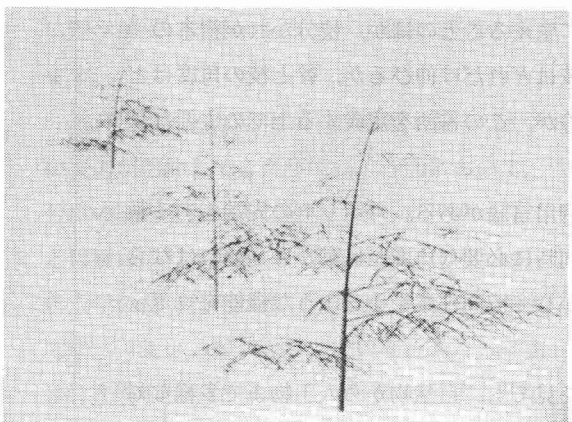
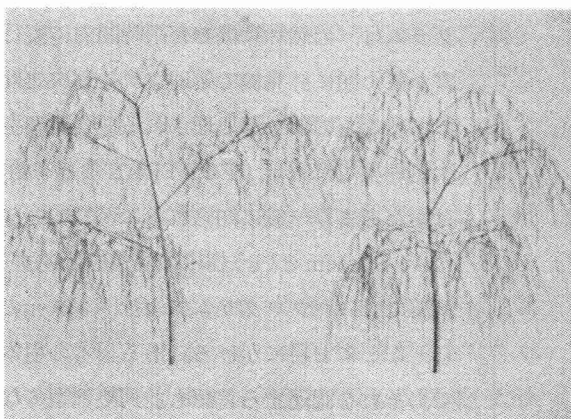


廣報

東京大学理学部



目次

表紙の説明	1
学部長就任にあたって	有馬 朗人 2
基礎科学と研究の自由を考える	速水 格 3
12年ぶりに大学に戻ってみると	住 明正 4
〈学部消息〉	7

表紙の説明

樹木の生長記述言語，ロボット言語，…

— 並列処理型計算機言語設計の研究をめぐる話題 —

情報科学の研究分野の一つに計算機言語の設計がある。計算機言語で書かれたプログラムは、当然計算機で有限時間内に実行可能でなければならない。計算機言語には、書かれた順に計算機で処理される逐次処理型のプログラムを書くためのものと、同時にあちこちの部分が処理される並列処理型のプログラムを書くためのものがある。逐次処理型用言語は、FORTRANなどを始めおなじみのものが多い。並列処理型言語はまだあまり一般に知られるに至っていない。そこで、まず、私共の研究室で設計したA-Systemという樹木の生長を記述するための並列処理型言語を紹介しよう。この言語で書いたプログラムにより、3次元の樹木をある角度から眺めたイメージを生成し、ここにお目にかける。ある一本の樹木において、枝はあちこちで同時に伸びるので、それを記述する言語も並列処理型になる道理である。楓（上左）、柳（上右）、竹（下左）、松（下右）の4種を示した。枝は、後から生えるものがすでに生えた枝の群をできるだけ日陰にしないような角度に生えることのほか、枝分かれが樹木の一点を何又に起きるか、次の枝分かれまでに枝はどれだけ伸びるか、幹と枝の角度はどうか、風や日照などの環境の影響はどうか等が、この言語を定義する上での主要な項目になる。

別の並列処理型言語の例は、ロボット制御用言語がある。ロボットの先端をある軌跡に添って動かすためには、複数の関節を同時に必要な角度だけ動かさなければならない。また、何台かのロボットを同時に動かして協同作業をするような機能をロボット制御言語に持たせる必要も出てくる。

このように、並列処理型計算機言語一つを見ても、自然物から人工物まで多様な対象を相手にすることになる。言語間に共通の要素は何か、最も高度な並列情報処理機械（失礼！）である人間と最も相性が良くてなおかつあまり利口でない計算機でも能率の良い処理が可能な形式で言語を定義するにはどのような情報表現形式を考えるべきかなど、情報科学研究上の興味は尽きない。

情報科学 国井利泰

学部長就任にあたって

有馬朗人

東京大学理学部長に私をお選び頂きましたことに対し心から感謝いたします。その重責に堪えられるかどうか、まことに心もとないところでありますが、幸いに教官、事務官そして技官各位の温いお力添えを賜わりますことにより、その任をまっとうさせていただきたくお願い申し上げます。

今日国立大学に対する臨教審を始めとする関係諸方面の関心そして圧力の強化は、注目しなければなりません。入学試験制度の見直し、特に共通一次試験をどう改善するかという議論から、独創性を発揮する人材を育てるにはどうしたらよいかという問題にいたるまで、大学人特に理学部に投げ掛けられている問題は多数あります。

教育における水平化政策の結果、多くの大学の実力が伯仲してきた事実は、一面において、日本の国力を強めることに、大いに役立ったことは疑いありません。一方この水平化のため、各大学の持つ特色が薄れたことも明らかな事実です。「追いつけ」という時代を終わり、「主導的立場を」というスローガンが、国策としてかけられるにいたった今日、私は東京大学理学部がはたして指導者になり得るだろうかという強い疑問をもっております。優秀な教官、職員を擁する当り理学部が世界の中で真に主導権をにぎれるようになることは、私の悲願とするところです。

講座費や面積の不足は目に見えて明らかなことであり、この点で理学部と国立研究所および附置研究所との格差は大変問題であると思います。学部学生の教育はもとより、理系大学院学生の教育の大部分に対して責任を持っております理学部の研究・教育環境の劣化は、日々深刻になって来ています。曰く校費の目減り、技官、事務官そして助手にいたる削減の影響は、この劣化を加速しています。

このような状況は、世界の中で日本が「主導的立場」をとるべきであるという国策とは全く矛盾しております。一方アメリカ政府は、大計画例えば大規模合成燃料計画、ウラニウム燃料施設等に対する直接大量投資への失敗にこりて、基礎知識の獲得と人材の養成の必要性を認識し、大学の研究施設と装置の改善に着手し始めました。事実1981年から1985年の間、大学の基礎研究へのアメリカ政府の投資は、実質的に約30%伸びております。私はここでアメリカのまねをせよと申し上げているわけではありませんが、大学特に理学部に対する政策について、日本政府の一考をうながしたいと思います。

このためには私の力はあまりにも弱いので、是非是非皆様の御力を結集していただきたいと思っております。そして東京大学理学部を国際的に見て真に一流にしようではありませんか。

基礎科学と研究の自由を考える

速水 格（地質学教室）

五十を過ぎると小学校や中学時代の友人達にも多少の時間的余裕ができてきたらしく、クラス会などの呼びかけがよくかかる。そんな時、「大学で化石の研究をしている」と言うと、「趣味と職業が一致していて幸せだね」とうらやましがられる。しかし、「化石の研究はどんな役に立つのかね」という質問も出る。化石の研究が地層の時代決定や対比を通して地下資源の開発に大きな役割を果たしているのは周知の通りである。しかし、私の研究しているのは、あるグループの生物がどんな過程をたどって進化してきたかとか、太古の海で古生物がどんな生活を営んでいたかといった問題であって、それが解明されたからといって人類社会に直ちに効用が出てくるとは思えない。昆虫採集に熱中している子供の知識欲と大して変りはないかも知れない。そこでこのような質問に対しては無理なこじつけをすることは止めて、「真理の探求は究極的に社会の発展に役立つ」という自分なりの“理学的信念”をもち出すことにしている。

おそらく基礎科学の研究者の多くは同様に目先の効用など考えずに研究を進めていることであろう。また、このような“直接役に立たない学問”を新たに志さず若者が減っているわけでもない。どうやら“学問の効用”と“学問の魅力”とは別の問題であるらしい。歴史的に見れば、当初は社会に何の効用ももたらさなかったささやかな基礎研究が大きな人類社会の発展（改善とは限らないかも知れないが）の出发点となった例が無数にある。また、このような期

待があればこそ、大学での研究の自由が保障されてきたのではなかろうか。

ところが、大学紛争と石油ショック以後、何かが狂い始めた。国の緊縮財政に伴う予算・人員の削減は、我国に限ったことではないにしても、研究者にとって堪え難いことである。基礎科学の研究を進める者にとって更に気になるのは、“科学の緊急性”が問われるようになってきたことである。確かにガン研究を含む遺伝子工学、電子工学、地震予知研究、海洋開発のように直ちに大きな効用が期待される分野があり、国策としてこれらに集中的な投資が行なわれる事情は理解できる。しかし、すべての研究に“緊急性”が問われ、それによって研究の重要度が推しはかられ、優先順位が決められるようになっては困るのである。この風潮が進むと政治が学問に優先し、実質的に研究の自由が阻害されることになるからである。どのような研究が長期的に見て社会に大きな効用をもたらすかは必ずしも予測できないことであるし、多くの基礎科学分野において研究は時勢と関係なく常に緊急である。

このような状況にあって、小まわりのきく研究者は時流に乗った研究グループに加わって自らの基礎研究の費用を得ることもできよう。しかし、産学共同などにおよそ無縁なピューリタンは「武士は食わねど……」で、じっと堪える他はない。研究の原動力はもちろん物質面よりも研究心にあるが、昨今のように教室予算の50%近くが光熱費と維持費に消えてしまうのでは、

がまんも限界に近づいていると言わざるをえない。

私の勤務する教室では多くの研究者にとってフィールド調査は欠かすことのできない研究の前提であるが、この6～7年に交通費・宿泊費は約2倍になったのに対して旅費の枠は全くの据置きである。科研費は採択されれば有難いが、平均して数年に1回程度であるから長期を要する研究はこま切れとなり、交付の時期が遅いのでフィールドシーズンに間に合わないことも多い。最近では教官の研究や学会出席の旅費はおろか、学生のフィールド調査の指導さえ満足に行えない状況が生じている。

新任早々にこんな泣き言めいた話になって誠に恐縮である。現在大学がかかえる難問は、入試、キャンパス、学問の現状にそぐわない縦割

りの研究教育体制など多岐にわたっているが、いつの間にか窮地に追いこまれている零細な基礎科学分野を今後どのように盛り立てるかについても抜本的な方策を考える時期に来ている。幸い理学は以前から最も自由に研究が行なわれてきた分野で、困難な状況にあっても研究室の活気は決して失われていないように感ずるが、我々研究者は研究の自由を享受するだけでなく、これを守り真に社会に役立つ可能性をもつ創造を行なう責任があろう。クラス会である旧友が「目先の効用を考える研究は民間でもできる。大学では時勢にとらわれない基礎的な研究をやってもらいたい」と言った。「全くその通り。君は実によく判ってくれているよ」と言って別れたが、多くの人に聞いて貰いたい発言であった。

12年ぶりに大学に戻ってみると

住 明 正 (地球物理学教室)

70年代初頭の激動の嵐の中、「知識の切り売りではなく、生きた学問を」と若さ故の啖呵を心で切り、意気込んで街に出たつもりが(街と云っても、情ないことに役所なのでしたが)、此度、のうのうと大学に立ち戻ることになりました。

大学も官庁も一つであり、単なる配置換なのだから、それ程気負うことはない、という気持がする半面、やはり、「大学」という思いもあり、心がはやります。更に、何となく昔の想いが心をよぎり、落ち着かない気分です。好きで愛憎半ばした昔の女に、図らずも十年後に再会

したような気分です。それでも、“おんりいいすたでい'70”と云う論文が出版される様になった位で、十年という歳月は、重いものです。十年一昔とは本当に良く云ったものです。

この十年余の間に、社会も、大学も、そして自分自身も大きく変わったはずです。そこで、今回は、環境も変わり、心がfreshのうちに、思いのたけを書いて、まずは御挨拶としたいと思えます。

まず最初に思ったことは、「大企業のサラリーマン」から、社員6人位の「有限会社の部長に転職したんだなあ」という感じです。毀誉褒

貶はあるものの、気象庁は、従業員6千名余、支店・営業所網を全国に持つ「大企業」です、とに角、業務内容も決まっています。それに比べて、東大は、規模こそ大きいものの、独立商店が集まっている商工組合のようなものと云えます。古い暖簾を誇る老舗から、最近著るしく売り上げをのぼしている新興のスーパーなどが寄合ってやっている様な感じに思えます。各店毎に、経営状態が異なるものですから、何事も決まるまでに時間がかかります。

このような環境の違いは、研究室・教室の中にも表われています。気象庁のような官庁組織では、その構成員は、職務内容は異なっても、外に対しては一つの組織の一員であり、思考の枠組み、価値観も、一定のものがあります（勿論、ドロップアウトする人もいることはありますが）。気象庁では、嘘とは云え、「日本の気象業務を支えていくのだ」という「信念」を持ちつけてゆくことは、気象庁という村落共同体の中では可能ですし、「最後の農耕民族」としては、「義理と人情のしがらみ」の中に生きて、お金を稼いでいくのも、それ程、居心地の悪いものではありません。それに比べ、「大学は、学問の府」という「情念」は余りにも大きく、今の商工会議所的組織では担いきれないように思います。一面では、商品経済が浸透しながら、他方では、基本的には前世紀的な身分社会が残り、構成員相互の利害も一致せず、なかなかと奇妙なところの様です。

とに角、十年余の間、社会に出て身につけたことは、人間関係を、社会を「商売の視点」から視ることが、一番自然になったことです。それと、やはり「コスト意識」です。「親方日の丸」の官庁にいても、一応身につくのですから、企業にゆけばもっと身につくことでしょう。勿

論、大学の先生でも、「商売に長けた人」もいるでしょうし、大学に残っていても、このような視点が身についたかもしれません。

二番目の印象は、全く個人的な事情かもしれませんが、気象庁での「青年将校」の立場から、「中間管理職」になったと云うことです。気象庁は、戦争終了後に、外地や、軍から大量の復員を吸収したため、この5年で、全構成員の半が退職するといういびつな組織でしたが、その変わり、我々「団塊の世代」は、ずっと「単純労働力」であったわけです。その分だけ、気ままな「労働者の生活」をしてきたわけで、この点に関しては、今の「モラトリアム人間」を非難することは出来ません。

大学に来ると、一応、責任ある立場なので、真面目に取り組んでゆかねばなりません。云いかえれば、やっと「中年の玄関口」に来たということでしょう。

三番目の印象は、教育についてです。すぐに思ったのは、「授業料が高い」ということです。アメリカの大気科学研究所の食堂で、ベル研から来ていた人と話した時、彼が、「アメリカでは、Ph. Dをとったら給料がぐっと高くなる。そうでなければ授業料に見合わない」と云った時、びっくりしましたが、日本でも、段々とその状況に近づいているように感じます。彼はひき続いて、「何故に、給料も高くないのに、大学院に進学するのか？」と聞いて来ましたので、「真理のため、公共の福祉のため」と答えたら、「共産主義社会！」とびっくりしてしまいました。冗談はともかく、大学院教育の矛盾がますます進行しているように思います。アメリカの様に、職業教育として大学院を位置づけるか（つまり、researchというbusinessを行うbusinessmanを養成する）、「大正教養主義に

みられるような全人教育」を目指すか、「職能集団としてのギルドの後継者養成機関」とするか、何らかの意志決定が必要の様に思いました。もっとも、このように悩んでいるところは、理学部ぐらいのものかもしれません。他学部では、とくにカタがついているのかもしれません。

いろいろ書いてきましたが、「組織に属し、40代を前にしたしがらみ」も結構大変です。権力をめぐる「出世競争」もそれはそれで大変です。とにわけ、「冬の時代」といわれる最近は、企業なり官庁なりの組織でしのいでゆくのも、しんどい作業です。その意味では、大学の先生は、一応、独立自営業者で、自分の意欲と決断でやってゆける領域が広いという幻想があるだけ良いように思います。

「たどりついたらいつも土砂降り」 — 僕が学生時代に好きだった唱の文句です。どこに行

っても、安穩な土地はないというのが実感です。それでも、十年余、社会に出て生きて来て、たいがいの事に、「それがなんぼのもんや」と云える様になりました。

大学は、個人商店である以上、「物に動じない、自己の確立したしかも、経営センスのある」経営者になるべく、努力してゆきたいと思えます。

(この文章を読まれる人の中には、“商売”の言葉に、不真面目と思われる方もあるかもしれませんが。学生の頃は、「人間としての実存をかけて、現代の諸課題と取り組む」等の空虚な言葉が好きだったので、社会に十年も居ると、“商売”の言葉で物事を語るのが、非常に自然に思えてきました。悪しからず。それが、一つの進歩と思って下さい。)

●いつも泥棒がねらっている (盗難注意) /

本郷構内は泥棒天国といわれています。いたるところで泥棒 (盗難) の被害にあっています。あなたのちょっとした注意で被害をくいとめられます。

～最近被害続出～

《 学部消息 》

東京大学職員の永年勤続者表彰

昭和60年3月31日限り定年退職する下記職員に対する総長の感謝状が、3月27日(水)正午、理学部会議室において、江上学部長から伝達された。

記

事務	羽鳥 浅子
"	山本 弘美
"	宮崎 松蔵
数 学	佐川 千枝子
物 理	水口 寛二
"	宮川 正雄
"	山口 清造
"	渡辺 政雄
生 化	野口 道子
動 物	今野 與一郎
植 物	佐久間 房子
鉱 物	金子 久子
地 質	新井 春治
地 理	菊地 政雄
植物園(日光)	湯澤 武夫
地 物 研	足立 茂

昭和60年4月12日(金)午後3時から、神田学会館において、永年勤続者(本学勤続20年)表彰式が行われ、本学部では、下記10名の方が表彰された。

記

事務	小嶋 壮介
"	伊藤 邦範
数 学	菊池 博子
物 理	福地 光一
"	山岸 健一
人 類	小黒 美穂子
鉱 物	立川 統
地 質	岸 美枝子
地 物 研	金田 栄祐
"	高橋 兵部

あなたです!

火事を出すのも

防ぐのも

教 授 会 メ モ

3月20日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 昭和59年度卒業業者決定の件
(4) 研究生の入学について
(5) 研究生の研究期間延長について
(6) 昭和60年度奨励研究員の受入れについて
(7) 昭和60年度民間等との共同研究について
(8) 人事委員会報告
(9) 会計委員会報告
(10) 企画委員会報告
(11) その他

なお、当日高倉教授、福島教授及び江上教授の3教授のご退官並びに佐藤(七郎)助教授及び小堀助教授の2助教授のご栄転にあたり、記念撮影(1号館玄関前)と送別の会(17時30分より、学生会分館・赤門脇)が行なわれた。

4月17日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 昭和60年度受託研究員の受入れについて
(4) 昭和60年度民間等との共同研究
(5) 人事委員会報告
(6) 会計委員会報告
(7) 教務委員会報告
(8) 企画委員会報告
(9) その他
教授会日程について

5月15日(水) 定例教授会

理学部4号館1320号室

- 議 題 (1) 前回議事録承認
(2) 人事異動等報告
(3) 人事委員会報告
(4) 企画委員会報告
(5) 昭和60年度専修学校研修員受入について
(6) 物品寄附受入について
(7) 理学部外国人学生指導講師の理学部内公募について
(8) その他
学務関係事務電算処理について

昭和60年3月28日卒業者氏名

数 学 科

石川雅雄	渋谷司	森田英之	伊藤敏彦
小倉宏之	河西洋文	川邊治之	小暮淳
志村立矢	菅原和久	富山義明	中西知樹
中邨博之	中山裕道	長嶋泰之	堀正
三宅佳子	村岡浩	村田富生	谷津弘一
吉澤庸一	浅野泰之	櫛 肅之	岩崎元一
海老原 円	大庫直樹	大津和之	大津一恵
岡田聡一	金子みち恵	岸田正司	木村俊一
小林俊行	佐伯修	住谷貢	田邊良則
中嶋純洋	中島啓	長田充弘	納谷信
中村亨	中村英史	橋本義武	坂東嘉人
久木和男	福林範和	星野明雄	堀 恵一
増岡彰	益岡竜介	村田尊弘	森 壽幸
山下隆志			

(53名)

情報科学科

市川周一	伊藤英紀	伊庭齐志	大内真
太田竜男	亀山幸義	河内谷清久仁	吉瀬隆
栗原勝秀	佐藤周行	土屋隆司	寺井恒順
真壁崇	宮本敬士	向野博文	村田典幸
森島裕	龍田真		

(18名)

物理学科

小野寺彰利	嘉藤誠	藤澤彰英	五十嵐靖行
大月未来	加藤武彦	加藤俊伸	川東健
楠田康雄	中山弘之	長谷川征三	三木洋一郎
青木伸也	赤坂展昌	伊藤克司	犬飼ひろみ
上田俊英	上野芳康	大澤一人	岡本冬樹
加藤晃史	唐澤毅	北川尚	久世正弘
栗田晴彦	黒河賢二	胡 晓	小林雅一
阪井浩	鈴木淳史	鈴木敏史	鈴木英之

曾山明彦
田仲由喜夫
寺内衛
中田仁
福谷克之
松尾泰樹
宮本和久
山口昌弘
米滿賢治

高澤豐
知久哲彦
藤平威尚
畠山哲夫
藤田香
松岡秀行
茂木健一郎
山元克也
若原祥史

高野史郎
塚本直也
中島大
林田清
藤野真司
松本裕敦
安原紀夫
横山順一
竹内薰

高橋卓也
築野孝
中田俊司
半場藤弘
船戸健次
溝口俊弥
山口敦子
吉田哲也

(67名)

天文学科

由井純
伊藤昌尚
新庄克彦

津島雅彦
木村正俊
関井隆

萩原秀郎
後藤央明

泉浦秀行
佐々木亜紀

(10名)

地球物理学科

野村清英
太田寛
久保匡夫
芝地貴夫
豊田信昇
依田昇

勝芳邦
大槻圭史
小寺雅子
新庄直樹
鳥越紀子

上嶋誠
大林正典
佐藤利典
藤浩明
西谷望

植竹富一
木下正高
澤田信明
豊田威信
馬淵淳

(21名)

化学科

海藻敬之
井上正之
大西洋
神田一浩
栗村元
高寺喜久雄
田中美穂
鶴村円子
西田悟
増道上勇

三宅隆
内堀伸健
大野茂
神原浩久
小西隆
高橋英太郎
谷口昌宏
鳥越秀峰
野口昭彦
増田正孝
三好徳和

石橋純一郎
大井康二
影山昭
金原玲子
猿渡英之
高橋昌己
田村正則
中井泰史
濱田功
松下明
山田恭久

井田隆
大崎康子
加瀬晃
久保祐治
関根理香
田中直子
土屋章彦
新美良夫
坂野斎
美津文典
山本達之

横山 明久

(45名)

生物化学科

松井 英毅
太田 邦史
佐藤 孝哉
田中 俊之
福田 純子
渡邊 肇

饗場 篤
大沼 雅明
角谷 美千子
津幡 卓一
三浦 康司

浅場 理佳
片平 智禎
高橋 大輔
仁科 博史
村松 知成

芦田 耕一
金子 貴史
竹内 眞樹
早野 俊哉
米澤 直人

(21名)

生物学科 (動物学)

阿部 寧
佐々木 洋
吉村 建二郎

内山 英穂
鈴木 玲子

片田 淳
田川 正朋

小島 茂明
中尾 啓子

(9名)

生物学科 (植物学)

旦原 真木
松本 友孝

朽津 和幸
和田 洋

角 隆幸

千葉 正史

(6名)

生物学科 (人類学)

近藤 勝美

塚原 高広

中村 美穂

林 典子

(4名)

地学科 (地質学, 鉱物学)

越智 忠衛
遠藤 一佳
高梨 泰彦
豊田 浩美

齋藤 雄一
鏡田 誠
田口 徹二
野口 高明

浅岡 伸之
加藤 泰浩
田上 洋人
谷下田 雅之

岩森 光
小島 和浩
利田 敏

(15名)

地学科 (地理学)

向後 武
瀬川 茂子

大内 彩子
田中 幸哉

小口 高
平岡 理恵

清水 一郎

(7名)

(合計 276名)

昭和60年3月29日大学院修士課程修了者氏名

数 学

相 曾 秀 昭	有 木 進	宇 澤 達	日 笠 貴 司
藤 井 哲 彦	岩 崎 克 則	小 川 瑞 史	大 河 内 俊 夫
大 鹿 健 一	金 子 昌 信	鋏 田 政 人	坂 口 勝 彦
申 吉 浩	田 中 康 彦	寺 田 至	戸 瀬 信 之
野 呂 正 行	橋 本 剛	兵 頭 治	古 田 幹 雄
松 沢 淳 一	宮 崎 桂	陳 蘊 剛	

(23名)

情報科学

梅 田 望 夫	小野寺 民 也	大 澤 範 高	岡 留 剛
佐 伯 慎 一	建 石 由 佳	藤 村 希久雄	細 谷 睦
松 為 彰	森 下 真 一	唐 培 雄	稲 本 直 太

(12名)

物 理 学

鶴 井 博 理	秋 葉 俊 彦	伊 藤 浩 之	伊 藤 真 之
伊 藤 領 介	伊 庭 幸 人	池 上 敬 一	石 田 浩
磯 健 一	小 山 嘉 晃	太 田 誠	大 苗 敦
奥 山 信一郎	河 合 俊 哉	亀 井 真一郎	川 村 静 児
北 村 豊	小 池 裕 司	小 泉 浩 治	小 林 健一郎
腰 原 伸 也	佐 野 弘 和	斎 藤 義 弘	清 水 禎
重 原 孝 臣	白 石 賢 二	炭 谷 俊 樹	関 博 文
仙 場 浩 一	田 村 裕 和	高 須 昌 子	瀧 田 正 人
鶴 秀 生	寺 井 章	時 崎 高 志	中 島 雅 之
永 野 賢 治	長 谷 川 修 司	橋 本 康 宣	花 田 貴
平 島 大	広 沢 誠	広 瀬 恵 子	堀 江 英 明
町 田 慎 二	松 尾 泰 夫	松 原 暢 也	松 元 和 幸
松 本 直 樹	森 本 卓 夫	柳 沢 孝 司	山 田 宏 文
山 田 貢 己	吉 田 広 行	吉 本 誠	米 山 満
閻 新 中			

(57名)

天 文 学

間世田 浩	川 合 清	小 林 秀 行	小 松 秀 実
佐 藤 伸 明	坪 井 昌 人	中 川 貴 雄	仲 谷 真 吾
森 沢 勝 郎	渡 部 潤 一	シリソムブーンラープ・ ピラパット	(11名)

地 球 物 理 学

庄 司 速 人	芦 谷 公 稔	五十嵐 丈 二	太 田 和 夫
勝間田 明 男	門 倉 昭	木 村 隆 之	児 玉 安 正
寅 丸 敦 志	中 込 縁	中 西 幹 郎	橋 口 能 明
橋 本 道 明	堀 尚 子	米 野 みどり	宋 学 家

(16名)

化 学

阿波賀 邦 夫	荒 谷 介 和	上 坂 友 純	海 野 雅 史
小 澤 芳 樹	尾 関 智 二	小 貫 敦 子	岡 田 尚 子
大 林 千 絵	岡 本 裕 巳	片 山 泰 之	上 岡 晃
栗 原 和 夫	小 林 修	齋 藤 努	下 田 昌 克
鈴木 睦 三	染 田 清 彦	田 崎 真 司	高 井 正 樹
塚 原 次 郎	都 築 誠 二	都 築 竜 二	鳥 羽 誠
富 森 浩 二	豊 田 耕 三	中 井 俊 一	間 庭 直 美
宮 地 克 明	武 藤 雅 之	森 川 敏 樹	森 田 俊 存
守 山 和 宏	山 田 克 己	湯 澤 洋 二 郎	由 良 毅
横 山 利 彦	吉 村 伸	米 元 勝 己	(39名)

生 物 化 学

井 川 俊 太 郎	石 川 雅 敏	石 川 雅 之	岩 澤 律 夫
岩 根 理	植 月 太 一	遠 藤 聡 史	大 島 潔
岡 本 仁	長 田 俊 哉	小 林 久 男	佐 藤 真 輔
仙 波 憲 太 郎	滝 沢 敏 雄	堀 江 信 之	武 藤 裕

(16名)

動 物 学

大 岩 和 弘	桜 井 武 司	末 松 直 也	高 木 中 昭 子
竹 居 光 太 郎	成 瀬 清	林 謙 介	廣 中 規 子
米 村 重 信			(9名)

植 物 学

安部俊彦 大西浩平 川岸郁朗 下河原浩介
杉山宗隆 鈴木康弘 竹重一彦 中尾俊史
綿野泰行 朴龍睦 (10名)

人 類 学

石井千賀良 内田亮子 (2名)

地 質 学

岡本和彦 有山智雄 大塚文哉 加藤隆
塩田哲也 高山邦明 本江誠治 松田博貴
山北聡 (9名)

鉱 物 学

廣井孝弘 渡辺秀弘 (2名)

地 理 学

篠田雅人 高田将志 (2名)

相 関 理 化 学

大島佳子 千葉徹 飯塚紀夫 石井寿一
今村保忠 越智信昭 大川和宏 木村亨
木下幹夫 小長谷一之 小林徹 小林幸夫
助田裕史 園池公毅 田尻敏之 谷真佐人
都倉康弘 堂前雅史 友澤秀喜 新津夏実
長谷川浩 廣野喜幸 増茂邦雄 松田透
南英俊 (25名)

科学史・科学基礎論

小松美彦 瀬戸一夫 (2名)

(合計 235名)

理学博士の学位授与者

〔昭和59年12月17日付（4名）〕

専門課程	氏名	論文題目
論文博士	山口 栄一	InAs および InP 界面の量子状態と電子輸送に関する研究
同	佐藤 春夫	リソスフェアにおける地震波の散乱と減衰 — ランダムな不均質構造による一次散乱理論 —
同	Robert J. McCabe	フィリピン中央部およびルソン島の新生代後期岩石の古地磁気学的研究
同	栗田 敬	岩石の破壊過程におけるダイラタンシーの研究

〔昭和60年1月21日付（3名）〕

地質学	清水 正明	磁鉄鉱系及びチタン鉄鉱系花崗岩類より構成される徳和バソリスの地質学的、地球化学的研究
論文博士	河添 健	半単純リー群上のアトミック・ハーディ空間
同	住 明正	北半球冬季モンスーン循環の研究

〔昭和60年2月25日付（14名）〕

論文博士	金沢 光隆	$\Delta(1232)$ 共鳴領域における軽核での (r, p) 反応および (r, pn) , (r, pp) 反応の研究
同	古屋 逸夫	埋込式体積歪計の特性と地震学への応用
同	大橋 国雄	反跳トリチウムと芳香族化合物の反応
同	杉本 伸夫	レーザー分光法による青色領域における NO_2 の研究
同	佐野 弓子	ピオシン AP41 — 構造・機能・遺伝子
同	菊池 慎一	メダカにおける移植片拒絶反応に関する実験的研究
物理学	山内 正則	29 GeV での e^+e^- 消滅反応における光子と中性パイ中間子の包含生成
論文博士	山口 和紀	構造及び操作のデータ・ベース理論
同	藤井 一宏	超音波減衰係数測定による液体 ^4He 中の ^3He 準粒子間相互作用の研究
同	真島 秀行	不確定特異点を持つ積分可能接続の漸近解析
同	岡本 久	完全流体の自由境界問題の数学的研究 — 自由表面の分岐と安定性
同	本川 達雄	棘皮動物における緊張性結合組織の研究
物理学	有坂 勝史	核子崩壊の実験的探索

専門課程	氏名	論文題目
物理学	延与秀人	多重粒子のダイナミクスおよび高励起核物質の生成

[昭和60年3月18日付(18名)]

論文博士	楊仕元	単細胞緑藻クラミドモナスにおけるカーボニックアンヒドラーゼの誘導および植物カーボニックアンヒドラーゼの多様性について
同	河村雄行	分子動力学法によるケイ酸塩結晶構造のシミュレーション
同	橋本和雄	色素と半導体を用いた光触媒反応の研究
同	鍵山恒臣	火山からの熱エネルギーの放出率の遠隔測定法の開発と日本弧における火山の熱的活動の特徴に関する研究
同	中原弘雄	累積膜の手法による機能性両親媒分子の配列制御
同	大塚一志	伊豆諸島周辺域における海況に関する研究
同	西田英男	黒潮蛇行の記述及び黒潮続流のエネルギー収支
同	西垣功一	変性ゲル電気泳動法等によるDNA高次構造の解析
同	中村澄夫	花粉の発達過程における coated vesicles と種々の細胞壁形成に関する微細構造的な研究
同	後藤潔	ソラマメ孔辺細胞プロトプラストの体積調節
同	松元重則	区間写像の周期点の分岐
同	山岡剛	細胞成長の調節におけるペクチンの役割についての研究
同	長谷川哲夫	オリオンKL天体周辺の星間ガス
同	高橋富士信	K-3型総合VLBIシステムを用いた、日本と米国観測局間の最初の試験観測における、基線解析の研究
物理学	飯野正昭	液体 ^3He および ^4He の表面張力に関する実験的研究
同	中原晴彦	拡張された「自然さ」を持つゲージ理論とカイラル対称性
地球物理学	轡田邦夫	西部北太平洋における海上風の応力の時空間変動
植物学	秋山忍	日本産ハギ属ヤマハギ節(マメ科)の分類学的研究

[昭和60年3月29日付(87名)]

数	朝田衛	代数体の最大アーベル拡大体の不分岐ガロア拡大について
同	徳山豪	Young 図形を用いた Combinatorics による群の表現の解析
同	三松佳彦	葉層輪体の自己交叉と横断オイラー数

専門課程	氏名	論文題目
情報科学	清水 謙太郎	高性能計算機アーキテクチャの研究
物理学	小笠原 宗博	レーザー生成プラズマによるカスプ型磁気容器の研究
同	赤井 和憲	宇宙空間における電子ビームとプラズマ相互作用実験
同	石田 勝彦	シス型とトランス型ポリアセチレン中のミュオンスピン緩和
同	伊藤 正行	稀積反強磁性体における核磁気緩和の磁氣的稀積効果
同	太田 滋生	核子のカイラル対称なソリトン・バグ模型
同	岡田 安弘	Kaluza-Klein 型宇宙論
同	片山 伸彦	重陽子入射運動量 2.0 - 3.7 GeV/c 領域での重陽子-陽子散乱の研究
同	河合 誠之	“てんま”によるラピッドバースター (MXB 1730-335) の X 線観測
同	黒田 和明	重力の逆二乗法則の実験的検証
同	斉藤 理一郎	グラファイト層間化合物の軌道帯磁率
同	坂本 浩一	真空紫外分光及び光電子分光による遷移金属化合物の電子状態の研究
同	滝本 淳一	1 次元系における電子相関と電子格子相互作用の競合
同	武末 真二	1 次元過渡的カオスのフラクタルな性質
同	谷 森 達	運動量 390 ~ 780 MeV/c 領域における $\bar{p} p \rightarrow \pi^+ \pi^-$ 及び $K^+ K^-$ 反応の研究
同	全 卓 樹	核子-核の弾性、非弾性散乱の首尾一貫した微視的記述
同	峠 暢 一	重心系エネルギー 29 GeV の電子・陽電子消滅反応における ϕ , K^{*0} 及び K_S^0 中間子の生成
同	富岡 明宏	筋肉の細いフィラメントの構造解析
同	野津山 泰幸	$Lix TaS_2$ ($0 \leq x < 1$) の電氣的性質
同	服部 哲弥	有限温度の非閉じ込め相への相転移
同	両角 祐一	スピン共鳴と再偏極によるアルカリハライド中のミュオン及びミュオニウム状態の研究
同	山下一郎	非一様電子ガスの非局所密度汎関数理論
同	山中 卓	$K^+ \rightarrow \mu^+ \nu$ 崩壊を用いた右巻きカレントの探索
同	湯本 誠司	電子線散漫散乱による Fe_3O_4 の研究
同	吉永 尚孝	16重極の自由度と相互作用するボソン膜型
天文学	山縣 朋彦	シユミット望遠鏡による銀河団の測光
同	秋田 亨	ひのとり搭載のブラッグ結晶分光計により観測された太陽フレア高温プラズマの性質
同	大石 雅寿	オリオン KL における星間分子の励起の研究

専門課程	氏 名	論 文 題 目
天 文 学	趙 世 衝	ミラ型変光星に対する SiO メーザ線の探索と統計的研究
同	中 井 直 正	銀河 M82 における分子ガスの構造と運動
地 球 物 理 学	遠 藤 猛	中部日本における重力潮汐の地域的变化に関する観測的研究
同	小 河 正 基	リソスフェア直下の熱境界層の力学
同	橋 田 俊 彦	震度データからもとめた日本列島下の三次元減衰構造
化 学	高 木 繁	モデル化合物 " チューリップ・ガーデンボルフィリン " の配位立体化学の研究
同	赤 木 右	海水中の微量元素に関する分析化学的並びに地球化学的研究
同	秋 山 隆 彦	有機硫黄化合物, 有機リン化合物の特性を活かした新しい合成反応の開発
同	石 橋 正 己	シンジュの苦味成分の研究
同	ト 部 明 子	日本における天然ガスの化学組成および同位体組成に関する研究
同	加 藤 修 司	赤外多光子解離による同位体選択的光化学反応
同	菊 地 耕 一	DMt T S F 錯体と HMT Te F 錯体の物性と構造
同	北 村 守	レーザー励起蛍光法によるハロゲン二原子分子の前期解離の研究
同	時 任 宣 博	含窒素橋かけ複素環化合物及びシリコンポロノフスキー反応に関する研究
同	長谷川 哲 也	希ガスプラズマの物理的ならびに分光化学的特性に関する基礎的研究
同	三 輪 哲 生	アミノアルコール類を不斉源とする高選択的不斉合成反応および新しい型のスクレスド合成法の開発
同	山 本 智	高分解分光と気体電子線回折による分子構造と分子内ポテンシャルの研究
同	横 畑 彰 人	大気中のハロカーボン類とメタンの精密分析と挙動に関する研究
同	ロドニーウイリアム スティーブンス	ビス(トリフルオロメタンスルホン酸)スズ(II)を用いる新しいアルドール型反応およびマイケル型反応の研究
生 物 化 学	河 田 行 弘	ヒート・ショックで誘導される低分子 RNA に関する研究
同	浅 田 誠	ヒト T 融合細胞の産生するリンホカインの研究: リンホトキシンの性状と機能の解析
同	井 上 直 樹	コリシン E 1 レプリコンの in vivo における DNA 複製開始の分子機構に関する研究
同	神 坂 泰	マウス脾リンパ球膜結合性ホスホリパーゼ C の研究

専門課程	氏名	論文題目
生物化学	泰地睦夫	タンパク質の生合成過程におけるアミノアシル tRNA およびペプチジル tRNA の 3' 異性体特異性
同	細谷浩史	棘皮動物卵細胞の actin 重合調節蛋白質
同	菅野純子	大腸菌における緊縮調節機構に関する研究
同	南康文	チュープリンとニューロフィラメントの相互作用
同	宮尾光恵	光合成酸素発生複合体の解体と再構成; 3 種類の表在性蛋白質の機能の研究
同	森島信裕	細菌型脂肪酸合成酵素の分子構築
動物学	三谷啓志	魚類培養細胞の放射線感受性と DNA 修復の研究
同	志賀隆	ヒメマス性行動に関与する終脳腹側野と視束前野の神経解剖学的研究
同	島田義也	メダカ始原生殖細胞の電離放射線感受性の特徴
同	村上柳太郎	ラット陰茎骨の発生
植物学	シャシカラ スワミ	ヒトヨタケの子実体形成の制御における不和性因子の役割に関する遺伝生化学的研究
同	相澤克則	<i>Dunaliella tertiolecta</i> の光合成における炭酸脱水酵素の役割
同	網野真一	ニチニチソウ同調培養の細胞周期における細胞壁多糖類の代謝変動
同	小関良宏	ニンジン培養細胞におけるアントシアニン合成系の発現と制御
同	谷本弘一	Mini-F プラスミドの複製に関する遺伝学的研究
同	寺島一郎	個葉光合成系の生態生理解剖学的研究
同	本間道夫	サルモネラ菌べん毛のフック付随タンパク質に関する研究
地質学	小屋口剛博	苦鉄質とマグマと珪長質マグマの混合機構: 二段階のマグマ混合モデル
同	高田亮	設楽地方, 中新世火成複合岩体の地下構造
同	崔桂林	韓国産現世海生介形虫
同	早川由紀夫	十和田火山の火砕地質学的研究
同	藤本光一郎	九州中北部野矢地熱地帯の熱水変質作用 — 流体相を媒介とした地質移動との関連 —
鉱物学	高畑努	パイロスマライト族鉱物の結晶構造と化学組成
地理学	松原宏	民間デベロッパーの都市開発と大都市形成
相関理化学	加藤裕	ポリエチレン結晶における高圧相の出現について
同	岩佐冬樹	棘皮動物の卵・精子におけるカルモジュリンの機能に関する研究

専門課程	氏名	論文題目
相関理化学	西田生郎	抗生物質チオラクトマイシンによる脂肪酸合成酵素の阻害とその作用機構
同	金井保之	MxV_2O_5 (M=Na, Li, Cu) の構造相転移
同	桜井力	準斉次半線型方程式の解のなめらかさの伝播
同	高橋裕一郎	好熱性ラン藻シネココッカスの光化学系 I 反応中心複合体
同	堤 誉志雄	非線型シュレディンガー方程式の解の大域的存在と漸近挙動
同	難波 勝	閃光分光法によるラン藻シネココッカスの光合成電子伝達反応の解析
同	三戸章裕	$CH_3C^{15}N$ および CD_3C^1 の赤外レーザーを用いた高分解能分光

人 事 異 動

(講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備 考
動物	教授	江上信雄	60. 3. 31	停年退官	山口大教授
天文	教授	高倉達雄	"	"	
地物研	教授	福島直	"	"	
物理	教授	有馬朗人	60. 4. 1	併任	理学部長・評議員 62. 3. 31 まで
化学	教授	朽津耕三	"	"	評議員 60. 10. 11 まで
地物研	教授	小口高	"	"	附属地球物理研究施設長 63. 3. 31 まで
物理	教授	田中靖郎	"	"	本務：宇科研教授 61. 3. 31 まで
"	教授	高柳和夫	"	"	"
"	教授	西村純	"	"	"
"	教授	清水幹夫	"	"	"
地物	教授	伊藤富造	"	"	"
"	教授	大林辰蔵	"	"	"
"	教授	西田篤弘	"	"	"
中間子	教授	近藤淳	"	"	本務：電総研電子物理研究室 長 61. 3. 31 まで

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
素粒子	教授	荒船次郎	60. 4. 1	併任	本務：東大宇宙研教授 61. 3. 31まで
"	教授	長島順清	"	"	本務：阪大理学部教授 61. 3. 31まで
植物	教授	飯野徹雄	"	"	東京大学遺伝子実験施設長 62. 3. 31まで
化学	教授	黒田晴雄	60. 4. 2	"	附属分光化学センター長 62. 4. 1まで
天文	教授	尾崎洋二	60. 4. 16	昇任	助教から
地物研	教授	國分征	"	"	"
数学	助教授	飯高茂	60. 3. 31	辞職	学習院大教授
植物	助教授	佐藤七郎	60. 4. 1	昇任	奈良教育大教授
地理	助教授	小堀巖	"	"	三重大教授
地質	助教授	歌田實	"	配置換	総合研究資料館助教授
地物	助教授	住明正	"	転任	気象庁から
植物	助教授	高橋正征	"	配置換	筑波大助教授から
鉱物	助教授	田賀井篤平	"	昇任	講師から
"	助教授	堀内弘之	"	"	阪大助手から
物理	助教授	河島信樹	"	併任	本務：宇科研助教授 61. 3. 31まで
"	助教授	小川原嘉明	"	"	"
"	助教授	松岡勝	"	"	"
地物	助教授	中村良治	"	"	"
中間子	助教授	早野龍五	"	"	本務：高エ研助教授 61. 3. 31まで
素粒子	助教授	高崎史彦	"	"	"
"	助教授	須田英博	"	"	本務：東大宇宙線研助教授 61. 3. 31まで
動物	助教授	嶋田拓	60. 4. 16	昇任	講師から
(助手)					
情報	助手	鈴木正幸	60. 3. 31	辞職	理化学研究所
"	助手	山口和紀	"	"	"
化学	助手	山村剛士	"	"	理科大講師
数学	助手	坪井俊	60. 4. 1	昇任	教養学部助教授
地質	助手	浦辺徹郎	"	転任	工技院地質調査所へ

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
地物	助手	中村 一	60. 4. 1	転任	気象庁へ
"	助手	増田 耕一	"	採用	
地物研	助手	山本 達人	"	"	
物理	助手	齋藤 理一郎	"	"	
情報	助手	藤代 一成	"	"	
"	助手	吉田 宣章	"	"	
地質	助手	藤本 光一郎	"	"	
数学	助手	寺田 至	"	"	
"	助手	岩崎 克則	"	"	
"	助手	古田 幹雄	"	"	
地質	助手	渡部 芳夫	"	"	
物理	助手	千葉 順成	60. 5. 16	昇任	高工研助教授

(職員)

物理	事務官	上原 功	60. 3. 2	辞職	
植物	事務官	山田 理子	60. 3. 4	採用	
物理	技官	八重樫 宏文	60. 3. 16	"	
植物園	技官	松崎 喬	60. 3. 24	死亡	
物理	技官	水口 寛二	60. 3. 31	定年退職	
"	技官	宮川 正雄	"	"	
"	技官	山口 清造	"	"	
植物	技官	佐久間 房子	"	"	
事務	技官	山本 弘美	"	"	
地物研	技官	足立 茂	"	"	
植物園 (日光分園)	技官	湯澤 武夫	"	"	
事務	図書掛長	羽鳥 浅子	"	"	
鉱物	事務室主任	金子 久子	"	"	
数学	事務官	佐川 千枝子	"	"	
生化	事務官	野口 道子	"	"	
動物	技能員	今野 與一郎	"	"	
地理	用務員	菊地 政雄	"	"	
地質	用務員	新井 春治	"	"	
物理	用務員	渡辺 政雄	"	"	

所属	官 職	氏 名	発令年月日	異動内容	備 考
事務	用務員	宮崎 松蔵	60. 3. 31	定年退職	
物理	事務官	畑山 治雄	"	辞 職	
化学	技 官	今井 勲	"	61.3.31まで 勤務延長	
植物園	技 官	石渡 丈夫	60. 4. 1	配置換	事務部へ
"	技 官	渡邊 隆之	"	採 用	
物理	技 官	村山 悟	"	"	
"	技 官	内田 千代美	"	"	
"	技 官	中村 昭彦	"	"	
"	技 官	大塚 茂己	"	"	
動物	技 官	小野寺 真希子	"	"	
事務	事務官	小貫 雅彦	"	"	
"	事務官	朝野 英彦	"	"	
"	事務官	高野 稔	"	"	
"	事務長	石渡 昭男	"	昇 任	海洋研事務部長
"	学務主任	三浦 俊暁	"	"	事務局 庶務部広報企画課長補佐
"	司計掛長	廣重 武文	"	配置換	経理部主計課監査第1掛長
"	庶務掛長	菊池 敏明	"	"	物性研総務課庶務掛長
臨海	事務室主任	大塚 幸男	"	昇 任	生研総務課厚生掛長
事務	事務長	戸張 喜之	"	配置換	大型計算機センター事務長 から
"	学務主任	田中 満嘉	"	"	薬学部学務主任から
"	司計掛長	渡邊 隆夫	"	"	司計掛長から
"	用度掛長	松原 喜彦	"	"	海洋研、大槌臨海センター 事務主任から
"	庶務掛長	橋本 勝真	"	"	医科研管理課人事掛長から
"	図書掛長	吉田 純子	"	転 任	大学入試センター共同利用 掛長から
数学	事務官	林 厚美	"	配置換	人事掛から
物理	事務主任	下野 茂	"	"	医学部用度掛長へ
"	事務主任	三村 和雄	"	"	医学部管理掛長から
事務	人事掛主任	渡部 健一	"	昇 任	人事掛一般職員から
"	庶務掛主任	鎌滝 道子	"	"	地理学教室一般職員から
化学	事務室主任	平尾 宣子	"	"	化学教室一般職員から

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
鉱物	事務室主任	長谷川 エイ子	60. 4. 1	昇任	化学教室 一般職員から
臨海	事務室主任	小牧 総江子	"	"	臨海一般職員から
植物園 日光分園	事務室主任	柴田 久仁子	"	"	日光分園 一般職員から
天文	技官	櫻井 敬子	60. 5. 1	採用	
物理	事務官	真野 裕子	60. 5. 15	辞職	

海外渡航者（6ヶ月以上）

所属	官職	氏名	渡航先国	渡航期間	渡航目的
素粒子	助手	武田 広	ス イ ス	期間変更 3. 28～12. 13	国際協同実験電子・陽電子衝突 実験のため

毎月1日は

「省エネルギー」

の日です。

外国人客員研究員報告

所 属	受け入れ 教 官	国籍	氏 名	現 職	研究期間	備 考
数 学	塩田助教授	アメリカ 合衆国	David R. Morrison	プリンストン大学 助教授	60. 5. 1 } 60. 6. 1	JSPS
物 理	山崎教授	カナダ連 合王国	George T. Ewan	クィーンズ大学 教授	60. 6. 1 } 61. 5. 31	JSPS
中間子	永嶺助教授	アメリカ 合衆国	Anthony S. Arrott	サイモンフレーザー 大学教授	60. 9. 3 } 60. 12. 31	JSPS
物 理	小柴教授	アメリカ 合衆国	Eugene W. Beier	ペンシルバニア大学 教授	60. 4. 1 } 60. 6. 30	ペンシルバニア 大学
人 類	尾本教授	ドイツ連 邦共和国	Georg Dewald	ボン大学人類遺伝学 教室 研究員	60. 4. 1 } 60. 7. 31	DAAD (ドイツ 政府交換留学生 会)
情 報	後藤教授	シンガポ ー ル	盧 家 福	シンガポール大学理 学部計算機科学科 助手	60. 4. 1 } 61. 3. 31	更新
数 学	塩田助教授	アメリカ 合衆国	Spencer Bloch	シカゴ大学教授	60. 6. 1 } 60. 7. 7	JSPS
生 化	岡田教授	中華人民 共和国	李 昌 尊	中国医学科学院 医学生物学研究所 ポリオウイルス研究 部副主任	60. 5. 1 } 61. 4. 30	中国政府
数 学	岩堀教授	シンガポ ー ル	Leong Yu Kiang	シンガポール大学 上級講師	60. 7. 1 } 60. 12. 31	松前国際友好財 団
物 理	有馬教授	カナダ	Donald Whitfield Sprung	カナダマクマスター 大学 研究員	60. 9. 1 } 61. 3. 1	カナダ自然科学 研究会議
中間子	山崎教授 (施設長)	ドイツ連 邦共和国	Klaus Kehr	ユーリッヒ原子核研 究所固体研究部 研究員	60. 9. 1 } 61. 5. 31	JSPS

教室主任・施設長等名簿

(昭60. 4. 1現在)

教室・施設名等	教室主任・ 施設長等氏名	電話番号	備 考
数 学 教 室	服 部 晶 夫	4 0 4 6	
情 報 科 学 教 室	米 田 信 夫	4 1 1 5	
物 理 学 教 室	宮 澤 弘 成	4 1 3 3	
天 文 学 教 室	堀 源一郎	4 2 5 7	
地 球 物 理 学 教 室	小 島 稔	4 3 0 0	
化 学 教 室	富 永 健	4 3 4 6	
生 物 化 学 教 室	酒 井 彦 一	4 3 9 6	
動 物 学 教 室	上 田 一 夫	4 4 3 6	
植 物 学 教 室	飯 野 徹 雄	4 4 6 5	
人 類 学 教 室	埴 原 和 郎	4 4 8 5	
地 質 学 教 室	速 水 格	4 5 1 8	
鉱 物 学 教 室	武 田 弘	4 5 4 3	
地 理 学 教 室	阪 口 豊	4 5 7 1	
臨 海 実 験 所	木 下 清一郎		(0468) 81-4105~7
植 物 園	岩 槻 邦 男		814-0138~9
地 球 物 理 研 究 施 設	小 口 高	4 5 9 0	
分 光 化 学 セ ン タ ー	黒 田 晴 雄	4 3 3 1	
中 間 子 科 学 実 験 施 設	山 崎 敏 光	4 2 3 3	
地 殻 化 学 実 験 施 設	飯 山 敏 道	4 5 1 4	
素 粒 子 物 理 国 際 セ ン タ ー	小 柴 昌 俊	4 2 3 1	
遺 伝 子 実 験 施 設	飯 野 徹 雄	4 4 6 5	
学 部 長	有 馬 朗 人	4 0 0 0	
評 議 員	飯 山 敏 道	4 5 1 4	
評 議 員	朽 津 耕 三	4 3 3 4	
事 務 長	戸 張 喜 之	4 0 0 1	
事 務 長 補 佐 (総 務 担 当)	神 戸 和 雄	4 0 0 2	
事 務 長 補 佐 (経 理 担 当)	福 井 保 男	4 0 0 4	
庶 務 主 任	蓮 見 公 一	4 0 0 6	
学 務 主 任	田 中 満 喜	4 0 0 3	

編 集 後 記

今年度から廣報の発行を年4回とし、6月、9月、12月、3月に発行いたします。前号に掲載された福島直先生の思い出によりますと、廣報は十数年前の紛争の際に生まれ、当初は月2回発行されて学部内外の情報交換に重要な役割を果たしたようです。現在、そのような必要はありませんが、廣報が理学部内の風通しを良くするために少しでも役に立てばと思います。 (松野)

編集：

佐佐木 行 美 (化学)	内線	4 3 5 9
田賀井 篤 平 (鉱物)		4 5 4 4
高 橋 正 征 (植物)		4 4 7 4
矢 崎 紘 一 (物理)		4 1 2 3
松 野 太 郎 (地物)		4 2 9 4
